

第三十一回 齋藤茂吉短歌文学賞

吉川 宏志 『石蓮花』

書肆侃侃房

選考委員

委員長 永田 和宏

委員 小池 光

小島ゆかり

三枝 昂之

【贈呈式】

令和二年十月二十二日（木）

（五十音順）

吉川宏志 『石蓮花』 (自選)

みずうみの岸にボートが置かれあり匙のごとくに雪を掬いて

海の場合面に変わる映画のひかりにて腕の時計の針を読みおり

金網は海辺に立てり少しだけ基地の中へと指を入れたり

〈反日は帰れ〉の声に拍手湧く 手の皮膚が出す音を聞きおり

食べることのできない人に贈るため花はあるのか初めておもう

人はみな途中で死ぬとおもえども海暮れて翁長雄志の途中

夜の更けに「痛い痛い」と母は呼ぶ麻薬を飲ませその声を消す

アビカンス、アビカンスと母は呟けり検索すれば石蓮花せきれんかのこと

きのうまで母撫でていたてのひらを祈るかたちに閉ざせる夕べ

箸の持ちかた叱られし日のありしか大きな骨を挟み取りたり

● 選考委員による選評

鋭さから濁りへの魅力

永田 和宏

吉川宏志氏の歌を読んでいると、日常の何でもないところに、詩となる素材がこんなに転がっているかと驚かされることが多い。切り口が鮮やかなのだ。

海の場合に変わる映画のひかりにて腕の時計の針を読みおり

そんな鮮やかさは、この歌集でも健在だが、今回強く感じたのは、そんな切れ味勝負の切っ先に、肉声の濁りが影を落とし始めたことだ。「高江」一連を始めとする沖縄、そして社会への関心の歌に、離れ住む後ろめたさとともに見送る母の死の歌に、そして息子や家族へ向けるまなざしに、それらは色濃く表われる。

敵を作るな それしか言えず肉を焼く火にぬく
みたるビール飲み干す

箸の持ちかた叱られし日のありしかな大きな骨
を挟み取りたり

長く間近に歌を見てきた歌人だが、そんな已むに
已まれぬ内側からの声の衝迫に素直に応じている最
近の吉川氏を喜びたいと思う。

吉川氏の歌業をよるこぶ

三枝 昂之

吉川宏志氏の受賞をまず喜びたい。

遠くから見る方がよい絵の前に人のあらざる空間
生まる

浜という文字に兵あり上陸をせし浜にいまも基地
は残りて

前者には「モネの絵に」の詞書があり、後者は沖縄
を詠った「高江」から。どちらにも対象の機微を掬い
上げる独特の視線が生きて吉川氏ならではの世界だが、
加えて今度の歌集では母の挽歌が特に心に残った。

拾い終え去りゆくときに黒ぐろと棺の釘は焼け残
りたり

亡き人はここに来ますよ 火のついたときだけで
きる小さな池に

釘や溶ける蝋燭を通して語る静かで深い喪失感。挽
歌のあるべき姿を示した成果だ。

感想寸言

小池 光

吉川宏志氏の作品は、いつもどこかで「詩」の香りがする。絶妙な比喻が、さりげなく散らばっていて、読む者をはっとさせ、頷かせ、あたらしいことばと現実に出会おうよるこびをもたらししてくれる。

『石蓮花』は氏の八冊目の歌集になるが、ここでもその比喻の精彩ぶりは健在だ。

曲がり家は曲がるところに闇を生むそこにねむりし女のからだ

岩手の遠野を訪ねたときの歌だが、曲がり家のその曲がる部分に「闇」を感じ、更に「女のからだ」を連想するイマジネーションは、冴えている。抑制されたスリリングなエロスがある。よく切れる刃物のようだ。沖縄をはじめとする社会活動、また母の死という重いテーマにも積極的に取り組んで、歌集を濃厚重厚なものにしている。

詩を観る眼

小島 ゆかり

秋陽さす時計台とも見比べて腕の時計に人を待ちおり

海の場合面に変わる映画のひかりにて腕の時計の針を読みおり

時計の歌は多くあるが、こんなささやかな、そしてこんな鮮やかな場面はなかなかない。そこにあらかじめ詩があることを知っているような眼。

吉川宏志さんの作品にごく初期のころからあったこの「詩を観る眼」が、自然体といえるまでに成熟した歌集と思う。

ここにいたら苛々すると子は去りぬ小さな池だ
った四人暮らしは

なんで茶髪にするのか分からないけれど大麦に
似て娘は立てり

息子と娘が成長し、家族のかたちが変化してゆく。それぞれの人生を生きる子の姿に照らし出される、歳月への思い。吉川さんは、詩の表現を探り当てる天賦の才能の持ち主である。

受賞のことば

吉川 宏志

二月のある日、斎藤茂吉短歌文学賞に選ばれたという電話を受け、本当に驚きました。そして、体の底から熱い喜びが湧いてきました。選考委員の先生方に、心より御礼申し上げます。

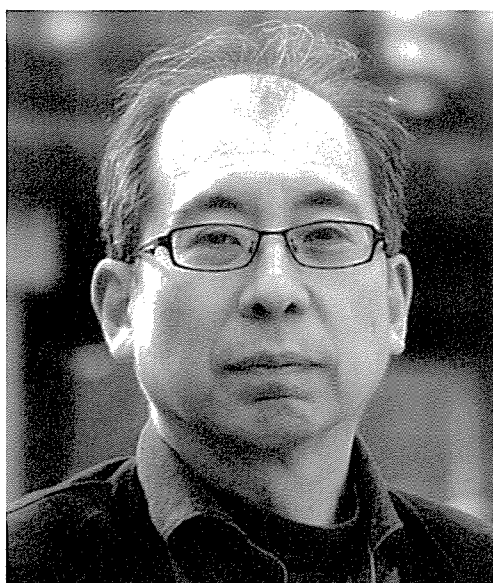
大学生のときに短歌を始め、茂吉の歌をしつかり読むように、と勧められました。卒業論文では歌集『寒雲』の戦争詠について書きました。拙い論文でしたが、これがきっかけで茂吉の歌のおもしろさに目覚め、また、短歌でどのように社会を表現していくのか、という問いを考えるようになりました。

二十四歳の春、初めて斎藤茂吉記念館を訪ねたことも忘れられません。「茂吉像は眼鏡も青銅こめかみに溶接されて日溜りのなか」という歌を作りました。卒論を書くうちに、強い親近感をもつようになり、生きている茂吉に出会ったように嬉しかったです。

『石蓮花』では、故郷の母の死を歌っています。作っているときは夢中でしたが、後になつてみれば、『赤光』の「死にたまふ母」の強い影響を受けていることがよく分かります。

いのちある人あつまりて我が母のいのち死し行くゆを見た
り死しゆくを
『赤光』

などの歌がこれまでに以上に身に沁みます。これからも、茂吉の歌に学びつつ作歌していきます。誠にありがとうございます。



第31回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

吉川 宏志 (よしかわ ひろし)

歌人。1969年(昭和44年)宮崎県生まれ 51歳。
昭和62年「塔」入会。現在、主宰。現代歌人協会理事。
京都新聞歌壇選者。

【主な著作等】

- 歌 集：平成7年『青蟬』、平成12年『夜光』、平成17年『海雨』、
平成18年『曳舟』、平成21年『西行の肺』、平成24年『燕麦』、
平成28年『鳥の見しもの』、平成31年『石蓮花』
- 著 書：平成19年『いま、社会詠は』(小高賢氏、大辻隆弘氏らと共著)、
平成20年『風景と実感』、
平成21年『対峙と対話』(大辻隆弘氏と共著)、
平成27年『読みと他者 短歌時評集二〇〇九―二〇一四』、
平成28年『時代の危機と向き合う短歌』(三枝昂之氏と共編)
- 受賞歴：平成6年第12回現代短歌評論賞、平成8年第40回現代歌人協会賞、
平成13年第9回ながらみ現代短歌賞、
平成17年第41回短歌研究賞、
平成18年第11回寺山修司短歌賞、第7回山本健吉文学賞、
平成25年第11回前川佐美雄賞、平成28年第21回若山牧水賞、
平成29年第9回小野市詩歌文学賞、
令和2年第70回芸術選奨文部科学大臣賞

これまでの受賞者

- | | | |
|-------|-------|--------------------------------|
| 第一回 | 岡井 隆 | 『親和力』 砂子屋書房 |
| 第二回 | 本林勝夫 | 『齋藤茂吉の研究—その生と表現—』 桜楓社 |
| 第三回 | 塚本邦雄 | 『黄金律』 花曜社 |
| 第四回 | 前登志夫 | 『鳥獣蟲魚』 小澤書店 |
| 第五回 | 斎藤 史 | 『秋天瑠璃』 不識書院 |
| 第六回 | 近藤芳美 | 『希求』 砂子屋書房 |
| 第七回 | 小暮政次 | 『暫紅新集』 短歌新聞社 |
| 第八回 | 馬場あき子 | 『飛種』 短歌研究社 |
| 第九回 | 吉田 漱 | 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社 |
| 第十回 | 佐佐木幸綱 | 『呑牛』 本阿弥書店 |
| 第十一回 | 伊藤 博 | 『萬葉集釋注』 集英社 |
| 第十二回 | 森岡 貞香 | 『夏至』 砂子屋書房 |
| 第十三回 | 竹山 広 | 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房 |
| 第十四回 | 藤岡武雄 | 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社 |
| 第十五回 | 清水房雄 | 『獨孤意尚吟』 不識書院 |
| 第十六回 | 小池 光 | 『滴滴集』 短歌研究社 |
| 第十七回 | 三枝 昂之 | 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店 |
| 第十八回 | 花山多佳子 | 『木香薔薇』 砂子屋書房 |
| 第十九回 | 永田 和宏 | 『後の日々』 角川書店 |
| 第二十回 | 河野 裕子 | 『母系』 青磁社 |
| 第二十一回 | 伊藤 一彦 | 『月の夜声』 本阿弥書店 |
| 第二十二回 | 品田 悦一 | 『斎藤茂吉—あかあかと一本の道とほりたり—』 ミネルヴァ書房 |
| 第二十三回 | 篠 弘 | 『残すべき歌論—二十世紀の短歌論—』 角川書店 |
| 第二十四回 | 秋葉 四郎 | 『茂吉幻の歌集』 『萬軍』 —戦争と齋藤茂吉—』 岩波書店 |
| 第二十五回 | 栗木 京子 | 『水仙の章』 砂子屋書房 |
| 第二十六回 | 小島ゆかり | 『泥と青葉』 青磁社 |
| 第二十七回 | 柏崎 驍二 | 『北窓集』 短歌研究社 |
| 第二十八回 | 橋本 喜典 | 『行きて帰る』 短歌研究社 |
| 第二十九回 | 大辻 隆弘 | 『景德鎮』 砂子屋書房 |
| 第三十回 | 春日真木子 | 『何の扉か』 角川文化振興財団 |

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇—八五七〇
 山形市松波二丁目八一— 山形県観光文化スポーツ部
 文化振興・文化財課内 TEL・〇二三—六三〇—二三〇六